

ともに坐る ともに生きる

島根県 玉雲寺 住職 曾根慎吾

曹洞宗の教えの中心には「坐禅」があります。私自身、僧侶としての生き方を学ぶため修行に赴いた際には、朝起きて坐り、夕方のお勤めの前に坐り、夜寝る前に坐り、多くの時間を「坐禅」の中で過ごしていました。

そうした坐禅中心の生活を送っていると、「坐禅」が日常の中に溶け込んでいく一方で、変に慣れてしまい、ついつい緊張感がとけて居眠りをしてしまったり、他のことに気を取られたり、「坐禅」と真剣に向き合えない自分が顔をのぞかせるようになりました。ですが、そんな自分の「坐禅」に向き合う姿勢が曲がっている時、ふと周りの修行仲間を配ってみますと、ピシッと背筋を伸ばし真っすぐに坐っている修行仲間の姿がありました。その凛とした「坐禅」の姿は、「私も、こうありたい」と思わせてくれるほどに美しく、見ているうちに自然と自分の曲がった姿勢が真っすぐ伸びていました。

一所懸命に坐る「坐禅」には、自分だけでなく他の人の「坐禅」をも正していく、よりよいものにしていく「力」がありました。そして仲間の「坐禅」に正してもらい、励ましてもらった私の「坐禅」が、また誰かの「坐禅」を励ましていくように、そこには、他の人へ他の人へと影響を与え、「巡っていく力」がありました。そしてそれは、「坐禅」だけでなく日常にも当てはまるものでした。

今、私は島根県奥出雲町のお寺に、一人で暮らしています。山奥のお寺でたったひとりで過いして、「草引きは明日すればいいや」、「今日は、ゆっくりし

よう」などと、自分の怠惰な心の声より大きく聞こえてくることがあります。

ですが、そんな時、私には自分の心の声よりも更に大きい音で、聞こえてくるものがありました。それは、近所の方々の動かすトラックターの音であったり、草刈り機の音であったり……。私の怠惰な心の声などかき消すかのように、周りの人たちの働く姿勢が、生きている姿勢が、音になって私の中に響き渡りました。お寺から周りを見渡せば、畑を耕している人、草を刈っている人がいます。その音や姿は、修行仲間の「坐禅」が、私の「坐禅」を励ましてくれたのと同じように、「私も頑張ろう」と、私の日々の生活や修行を励ましてくれるものでした。

私は修行仲間と離れ、奥出雲という地で、一人で修行をしている気になっていました。しかし、それは私の勘違いでした。立場は違いますが、お寺のお檀家さんや地域の方々も、それぞれの方が、それぞれに、自分自身の人生と真っすぐに向き合っているように思います。私はそのような方々と一緒に、修行をさせていただいたのだと気づきました。

奥出雲に来て8年。お檀家の皆様、地域の皆様とともに生きていく中で、たくさん生きる力をいただいて来ました。今度は私自身が、誰かの生きる力となる僧侶であるように、目の前のこと一つ一つに一所懸命に、そして丁寧に向き合っていければと思います。